



## 歌の源流



歌の源流

一、「うた」から始まった仏教

お釈迦さま(シタマ・シッカ)がインドに生まれ、仏教を説かれたのは紀元前450の頃と言われます。そのころにはもちろん「文字」はありません。だから弟子たちは、釈迦から聞いた教えを伝えやすい「うた」にして覚え、それを子や孫へ語り伝えたといわれています。お釈迦さまが亡くなつて百年もたつてからその弟子たちが集まつて、聞き伝えた歌を、互いに確しかめあいました。「わたしはこのよう聞いています」(如是我聞・我聞如是)。(これを結集(けつしゅう)とか合誦と言います)。以後たびたびこのことが行われながらサンスクリットという文字ができるまで仏教は「うた」で伝えられていきました。

かくて、仏さまが亡くなつておよそ百年

も過ぎると、それら伝承の歌は(ストラ)

経や律言う形で文章化され、またアショカ王

の保護もあって、伝承されてきたお釈迦様の

教え(経)の理解解釈(「論」)が生まれ、二十幾つかの学派・部派が出来、いわゆる仏教は次第に「教学化・学門化・理論化」していきました。それ以降、その「仏教」は北や南へ分かれて中国や南方セイロンへも伝えられていき、それぞれの地方の宗教や文化などとも融合し変容していきました。しかし仏教原始の「うた」はそのまま、「伝えられ、たとえば中国でも日本でも「梵唄」(ボンバイ)、「讀偈」(さんげ)として大切に伝えられていきました。比叡山へつたえられたそれらの「うた」を親鸞様も熱心に習いました。親鸞聖人は浄土真宗の極意を、「正信念仏偈」(お正信偈)といううたにして高らかに歌い上げました。また晩年、日本の伝統の「和讀」(お正信偈)の形式で歌い上げ、民衆と共にほとけさまの教えの真意を共に喜びあいました。

二、日本の「うた」の伝統

日本にかぎらず「うた」の原始は「歌垣」(うたがき)にあるようです。日本では太古のひとびとは苛酷な労働のか、ある時季をきだめて市(いち)や社(やしろ)の広場や森などに集まつて、燃える火をかこみ踊りあい、素朴な樂器を奏し歌を交換して村人・部族の結束を確認しあい、また「あらたな出会い」を結びあいました。ことにこの日は「性」は解放され新らしい出会いを生むそういう日でもありました。まさにこのとき「うた」が生まれ村落部族の結束・絆をつくる源泉でもありました。おそらくそれは「比叡」などという約束がありました。その後日本人は桜を好みます。しかし日本がこの花に寄せる心には二種あります。一つは「敷島の大和心を人間わば朝日ににぼう交換して村人・部族の結束を確認しあい、また「あらたな出会い」を結びあいました。ことにこの日は「性」は解放され新らしい出会いを生むそういう日でもありました。まさにこのとき「うた」が生まれ村落部族の結束・絆をつくる源泉でもありました。おそらくそれは「比叡」などという約束がありました。その後日本人は桜を好みます。しかし日本がこの花に寄せる心には二種あります。一つは「敷島の大和心を人間わば朝日ににぼう

山桜かな」など、この花のパツと咲き散る「潔きよさ」。もうひとつは「はかなさ」「あはれさ」(せどうか)「防人の歌」(さきもりのうた)なども民衆のあいだに歌いつがれ、平安時代にはそれが「今様」「和讃」となつて歌い継がれていたのです。後白河上皇がそうした民間に謡われていた俗歌・流行歌・宗教贊歌を集めて『梁塵秘抄』(りょうじんひしょう)を編んだのは平安時代も末期で有りました。

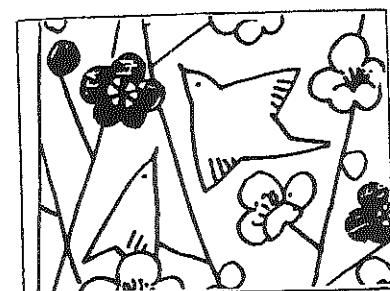
そういう風潮が平安貴族へももちこまれ、たとえば天皇家、大伴家など、それらの家柄を讃え、またそれぞれの行事を祝ぐ(ことほぐ)「うた」が盛んに歌われるようになつてきました。たとえば『万葉集』の柿本人麻呂は宮廷歌人として天皇を讃えその国をしろしめす徳を褒め讃える歌の専門歌人です。この二つの流れのうち後者は、どうしても貴族的・情緒的で、たとえば「無常」といふ仏教の教えを「無情」「もののあわれ」とうしてそんなものはないはず)

「わがよたれそつねなりむ」

「有為」は「有為法」といって「無為法」に對することばで「つくられたもの」。「いろこの世界にありとあるもの、何が一体、常住不變なものがあるでしょうか(なにひとつとしてそんなものはないはず)」

「うるのおくわまけふ」と「ゑて」。

「有為」は「有為法」といって「無為法」に對することばで「つくられたもの」。「いろこの世界にありとあるもの、何が一体、常住不變のもの」。だから瞬時ときどきに造られているもの」。だから瞬時ときどきに「変わるもの」です。有為転変。「無常」です。この世で「常住不變のもの」「これこそわたしの」というものは一つもないと言つてゐるのです。にもかかわらずあたかも「これはわたしの家」。「これこそわたしの考え方など固定観念や実態観念にまとわりつかれ(これを無明・渴愛といふ)根本煩惱としているのです。



## 報告

去る一月一四日、平成二十四年度の勝林寺代議員会が行われ、新年度の予算、事業計画などが承認されました。また、任期満了に伴う総代の改選が提案され、以下の責任役員と総代が承認されました。ご報告いたします。

## 《責任役員・総代名簿》

責任役員	中島 武志様
総代会長	大石 正和様
総代	田中 重雄様（栗尾）*
総代	永井 孝一郎様*
総代	玉井 克弥様
総代	中嶋 英樹様*
総代	湯口 博文様
総代	田中 嘉信様*

\*印は新任

尚、永きにわたり勝林寺護持繁栄にご尽力いただき、このたびご勇退されました以下四名の総代様には、住職より感謝状と記念品が贈られました。

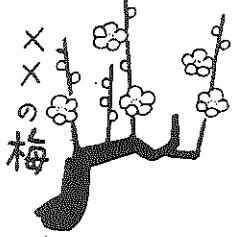
## 《勇退された総代様》

中島 武志様

富嶋 千秋様

兼井 通夫様

齊藤 保様



## ことばの泉

## 「どくしょなこと」

中風で長く寝ていた祖母が、孫娘の手荒な扱いに対して「マアそんなドクショウナこと云いなん」など云っていたのを思い出します。「どくしょ」とは「毒性」。「毒々しいこと」「ひどいこと」「憎らしいこと」。祖母が亡くなつて五〇年。今になつて「どくようなことしたもんだ」と反省しています。

## 「こまめの歯箋せしり

まず「こまめ」。お正月のお節料理に欠かせない片口鰯の稚魚を甘辛く煮しめたもの。「田作り」とも言う。それが歯軋りをするとは如何なることか。『こまめ』と書いた本もある。ちいさめ即ち小者という意味かも知れない。ともあれ能力・技能の劣ったものが、到底勝てない上位の者を見て羨望しぐれしさのあまり歯軋りをする。「どうしていつも勝てないのか残念!」

ことし正月、つくづくと「こまめ」の顔を見てみると、なるほど確かにそのような顔をしていました。

## 日那さん

「だんな」は元インドの古代語サンスクリットで「ダーナ」。布施。ほどこしの意味。

中国では檀那と音訳した。日本では古くから寺院などを財政的に支える援護者を「檀那」によく登場する。近世になつて家を支え妻のために献身してはたらく人を指すようになつた。現代ではむしろ家長のことの蔑称として使われる傾向もある。ちなみに「檀家」(ダメダメ)なども、寺院を布施によって支える家という意味からその門信徒のことを云う。

ちなみに仏教では布施について財施・法施・坊舍施・無畏施)を言う。

## 他山の石

中国の古典『詩経』にあることば。「他山の石以て玉を攻(おと)むべし」が出典。よそ

の山から出た粗悪な石でも、自分の宝石を磨くには役にたつ。自分より劣った人の言行も自分の知徳を磨く資料となるということであるので、決して上位目上の人の言行と間違つて使つてはならない。

## あんばい

もともと「塩梅」(エンバイ)。その訛りでアンバイ。当て字、接排・按配・按梅など。

①塩と梅酢で調理。一般に調理の味加減。「ええ塩梅にできあがつとるワ」「ええ塩梅の湯加減でつせ」②ものごとの程あい。身体の調子「塩梅悪うて寝てますのや」③程よく処理する「始めての土地で塩梅暮らしてなはるか」など。



## 二月 勝林寺 予定

五 日 (日)	勝林寺仏事 総会
一一日 (土)	勝林寺仏婦 評議委員会
一九日 (日)	岸下きよみ宅一周忌

(敬称略)

## 平成二十四年度勝林寺主な行事予定

三月一〇日	春彼岸会
四月一四日	観桜会
五月一七・一八日	念佛奉仕団
一九日	降誕会
六月二三・二四日	納骨研修旅行
三〇日	おみがき奉仕

七月 八日	永代經
九日	仏婦総会
一九日	おみがき奉仕
六月二三・二四日	納骨研修旅行
三〇日	おみがき奉仕

九月一二日 秋彼岸会

八月 八日 戰没者追悼法要

一九日 仏婦・子ども研修会

七月 八日 永代經

九月一二日 秋彼岸会

八月 八日 戰没者追悼法要

一九日 仏婦・子ども研修会

一〇月二七日 敬老報恩講

一一月一七日 おみがき奉仕

二一・二二日 報恩講

一二月一七日 餅つき

二一日 除夜会

\*毎月一六日午後七時三〇分より